

『西湖二集』の研究

—明清時代の通俗文学と杭州の地域文化

翁 嘉

第一章、明代の江南地域の小説

西湖の美しい景色は、古くから多くの人々を魅了してきたが、南宋の亡命政権の150年間、杭州は首都として最も栄えた時期を迎え、当時の中国の最大の都市となった。

美しい自然環境を有する杭州は、言語、宗教、風俗、習慣などの文化の諸側面においても独自の特徴を有していた。たとえば、江南水郷の杭州は水の神と深く結びつき、さまざまな民間信仰を生んだ。これらの民間信仰は、小説やお芝居、民間故事などいろいろな形で伝播されてきた。

元代には耐得翁『都城紀勝』、西湖老人『西湖老人繁勝録』、周密『武林旧事』と呉自牧『夢梁録』のような、南宋時代の杭州について書かれた筆記があったが、明代に入ると、明・田汝成の『西湖遊覧誌』と『西湖遊覧誌餘』という新しいタイプの書物が誕生した。『西湖遊覧誌』及び『西湖遊覧誌餘』は最初の旅行案内書として杭州を全国に観光、遊覧の対象として紹介しただけでなく、江南地域と文化についての情報も提供した。

明代後期から明末にかけては、中国通俗文芸のそれまでの成果が集大成され、最も多産な時代であった。この時代において最も注目すべきは、江南地域の小説の発展である。長編である四大奇書（『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』）の創作あるいは編集に関わった人々の多くが江南地域と深い結びつきがあるほか、この時期の短編小説集の代表作といえる「三言」「二拍」（『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』、『初刻拍案驚奇』、『二

刻拍案驚奇』)などの作品も江南地域で作られ、流布していった。

このように明清時期、江南地域において小説創作は一種のブームになり、特に、周清原の『西湖二集』のように専ら杭州を舞台にした故事を素材とする作品集、言わば「地域小説集」も現れたことから、杭州の文人たちは地域とその文化に対する強い意識を持って小説を創作したと思われる。

明末の『西湖二集』の物語の内容は、主に田汝成の『西湖遊覧誌』と『西湖遊覧誌餘』、沈国元の『皇明从信録』に基づいていると考えられる。また部分的には周密の『武林旧事』、馮夢龍の『情史類略』、陶宗儀の『輟耕録』、李昌祺の『剪灯余話』から引いたと思われるものもある。

一方、『西湖二集』の影響は後世にも及んでいる。清の康熙十二年(1673年)古呉墨浪子が編集した『西湖佳話』¹、また乾隆五十六年(1791年)、『西湖二集』や『西湖佳話』から選んだ作品集である陳樹基の『西湖拾遺』²がある。『西湖二集』から九篇が選ばれ、『西湖文言』と改名され、『海内奇談』の一部になり、手抄本の形で日本まで流布した。日本文化元年(1804)に『通俗西湖佳話四巻』と翻訳されている³。

日本は勿論、中国においても、『西湖二集』に対する研究の歴史は浅く成果も少ない。筆者は杭州の地域文化を活用し、江南地域と関係のあるこのテキストを解説していくこととする。

第二章、研究対象——『西湖二集』

1. 『西湖二集』の特色

明朝のことを「我朝」あるいは「我明」という用語で表現し、明代の皇帝に「爺」をつけて呼ぶこと、特に、この語彙が小説中の登場人物の会話の中ではなく、作者の議論や叙述の部分で使われているので、作者は明代の人であることが分かる。また、『西湖二集』の「由」のかわりに「繇」、「検」のかわりに「簡」を使用しており、明崇禎帝朱由検の諱を避けていることから、明・崇禎年間（1610—1644）に作られたと推測できる。

『西湖二集』は全部で三十四巻あり、全て杭州と関連する故事を編集し、杭州の社会と風土、様々な時代の杭州の様子を反映した物語となっている。鈴木陽一氏は1998年日本中国学会全国大会で『『西湖二集』の「語り」について』を発表し、『西湖二集』には杭州の歳時風俗及び方言から江南文化の独自性、杭州の個別の場所と物語から観光都市杭州の物語が見られ、そしてそれは杭州の芸能及び都市伝説として語られる物語であると述べた。

『西湖二集』に関する専著の中では阿英の『『西湖二集』所反映的明代社会』⁴が最も早い。

巧妙な書き方以外に、一番価値のあるところはその内容が明代社会の実態を幅広く反映し、特に政治の腐敗、官僚の賄賂、民衆の苦しい生活への批判や、当時の風俗習慣、一部分の文人の現状に対する態度なども読み取れることだ。また、芸術的な面で、巧妙適当な皮肉と流暢な文はこの本の最大の特長だ。

魯迅の『中国小説史略』⁵には「文章も流暢であるが、皇帝の徳を頌し、教訓を垂れたがり、また憤慨の言語が多い。」と述べている。魯迅のこの評価が後の学者に多大の影響を与えた。

『西湖二集』の表現については、どちらも「流暢」とであると高く評価している。また「憤慨の言語」、或いは実態の「反映」、政治などへの「批判」など、『西湖二集』の現実性にも一定の評価を行っている。

後で詳しく述べるが、杭州の代表人物の一人の錢鏐を神格化し、高く評価することから見れば、杭州・杭州人を美化する傾向がある。これは一種の「帝都へのあこがれ（ユートピア思想）」であると考えられる。

鈴木陽一と陳皆平は流暢な文章、特に極めて頻繁に当時流行したと思われる小説（『西遊記』『水滸伝』）や戯曲（『牡丹亭』）の名前や内容を大量引用したことは作者の知識人の素養を充分に表していると指摘している。（鈴木陽一『『西湖二集』の「語り」について』1998 日本中国学会全国大会口頭報告、また、陳皆平『『西湖二集』与『牡丹亭』』1993 浙江大学学報）

そのほか、現世への不安・不満、特に自分が才能を持っているのに出世できない憤慨が小説の中に沢山表現されていると述べている。

2. 『西湖二集』の版本

中国の小説研究において、版本の問題が重要であり、『西湖二集』の版本を確認する。

『西湖二集』の版本は以下である。なお、未見の版本については、大塚秀高『増補中国通俗小説書目』（汲古書店1987）によった。

- 明・崇禎間序刊本（原刊本？）

明崇禎間刊。現在北京図書館、中国芸術研究院劇曲研究所（傳惜華旧蔵本）、内閣文庫（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）にある。

- 清・雲林聚錦堂刊本

清初の刊本で北京図書館、北京大学図書館、天理図書館、京都大学、東北大学にある。この他に阿英旧蔵本がある。（未見）

- 国立政治大学古典小説研究中心、明清善本小説叢刊所収（1985年、天一出版社）

傳惜華蔵本の影印本であるが、欠葉、欠落、不鮮明な箇所を手書きで書き足している。

- 古本小説集成所収（1990年、上海古籍出版社、古本小説集成編輯委員會編）

蕭欣橋の前書きによれば、このテキストは傳惜華蔵本の影印本で、欠葉

を前掲の内閣文庫本で補足したものである。

- 中国文学珍本叢書所収（1936年、上海雑誌公司）

本の前に「貝叶山房張氏藏版という刊本に基づいて排印した」と書かれ、湖海士の序文があり、周作人が表紙を題した。（未見）

- 『西湖文芸叢書』本（1981年、浙江人民出版社）

前掲中国文学珍本叢書排印本を底本にし、北京大学図書館と北京図書館所蔵の清・雲林聚錦堂刊本を参考にし、編集した排印本で、横組み簡体字である。劉輝林・徐元が校注した。注解は詳細だが、「西湖秋色一百韻」等付録の詩文や「戚將軍水兵篇并海防図式」「緊要海防説并救荒良法数種」などの内容が削除されている。

筆者は底本として前掲明・崇禎間序刊本を使用し、排印本である前掲西湖文芸叢書本をその句読を含めて参照した。

3. 作者の周清原

目次のページに「武林濟川子清原甫纂」、巻末の「西湖秋色」にも「武林周楫清原甫著」と書かれていること、また、十五巻に「我浙江也有一个人」とあることから、作者は浙江武林（今の杭州）の人であり、諱は楫、字は清原、濟川子などが彼の号であることが分かる。

序文によれば、周清原は優れた才能を持っているが、出世できず、客を招待することさえできないほど貧困であった。「懷才不遇（才を抱けども恵まれず）」で、むしろ琵琶を弾くことで皆に知られる芸人になりたい、一生字が読めない人になりたいと言い、大変同情すべき人だと述べている⁶。

また巻一の入話には『剪燈新話』の作者である瞿佑の物語を枕とし、瞿佑の悲惨な人生を慨嘆し、作者自身が小説を書いた理由を説明したものであり、巻一の入話というより『西湖二集』の全般的な「入話」と考えられる。特に勸善懲惡と悲憤慷慨という執筆の動機と目的も明記していることから、これが魯迅に「教訓を垂れたがり、また憤慨の言語が多い」と言われる原因となったのではないか。

序文、及び小説の中の「戚將軍水兵篇并海防図式」「緊要海防説并救荒良法数種」などの内容から見れば、周清原自身の経世済民の意志とそこから生まれる出世心が見て取れる。さらに、作品中にいろいろな角度から、無能な人が官僚になり、有能な人は出世できないことを描写しているのは、明末の社会状況において、当時の有能な文人が出世したくても出世できないことの反映であり、当時の社会と自らの境遇について「憤慨の言語が多い」ことは当然であった。

4. まとめ

明・崇禎年間（1610－1644）に杭州人の周清原によって作られた『西湖二集』の表現については、「流暢」であると高く評価されている。勸善懲惡と悲憤慷慨という目的で「教訓を垂れたがり」、「憤慨の言語が多い」とも言われた。『西湖二集』の故事は宋高宗「偏安」、南宋の滅亡の史実と明洪武帝時期の「盛世」を背景にし、当時の社会現実に対して、詳しく叙述し、政治の腐敗などを批判した。これも当時の知識人が現状に不満を持っていることを反映している。このように実態の「反映」、政治などへの「批判」など、『西湖二集』の現実性にも一定の評価が行われている。

その一方、流暢な文章、特に極めて頻繁に当時流行したと思われる小説の名前や内容を大量引用したことは作者の知識人の素養を十分に表した。また杭州の風習と遊覧状況についても生き生きと描写したので、現在の私たちにとって当時の風習・文化を研究するためのとても価値ある資料でもある。杭州の代表人物の一人の錢鏐を神格化し、高く評価することから見れば、杭州・杭州人を美化する傾向がある。これは一種の「帝都へのあこがれ（ユートピア思想）」であると考えられる。

第三章、幻の『西湖一集』

『西湖二集』という奇妙な書名から、以前から、学者の間で『西湖二集』に先行する短編小説集『西湖一集』（あるいは『西湖初集』、『西湖説』、『西湖集』などのタイトルが考えられるが、ここでは便宜上『西湖一集』とする。）の存在及びその作者をめぐる論争がある。同集の有無、或いはその形式がどのようなものであったかについて考えることは、『西湖二集』の性格を考える上でも、またこの時代の短編小説集の発展過程を考える上でも極めて重要であり、ここで少し述べておくことにする。

1. 『西湖一集』をめぐる意見

まずは魯迅をはじめ、「『西湖一集』は存在し作者は周清原であった」という意見だ。阿英氏（『西湖二集』所反映的明代社会）・謝国禎氏（『春明読書記』）も同意見である。

次に、「『西湖一集』が存在したが、作者は不明。」という意見である。孫楷第氏がこの意見（『中国通俗小説書目』）である。

『西湖一集』の存在については現物の確認はできないが、鄭振鐸氏は「明清二代の平話集」で『二集』の巻十七「劉伯温 賢人を推薦して浙中を平らぐ（劉伯温薦賢平浙中）」の中で「『西湖一集』の「占慶雲劉誠意佐命」の中でおおよそはすでに述べた」とあるのを引いて『一集』の存在の証左としている。

そのほか、1990年に蘇興氏の『西湖一集』が存在しないという意見もある（「所謂『西湖一集』的問題」（『明清小説研究』1990）。根拠はのち清乾隆五十六年の陳樹基の『西湖拾遺』が『西湖二集』より二十八篇もの多数を引くのに、『一集』からは一篇も引かないのを見れば、『西湖一集』というものはなかったのだ。

2. 『西湖二集』巻十七の再確認

『西湖一集』の存在をめぐる議論で一番使われた根拠は『西湖二集』巻

十七「劉伯温薦賢平浙中」の内容だった。ここで、『西湖二集』巻十七の内容の再確認を行う。

排印本である前掲西湖文芸叢書本には確かに蘇氏が引用した内容があるが、原刊本である前掲明・崇禎間序刊本には以下のような文書であった。

「雖然如此，識异人于西湖云起之時，免圣主于鄱阳炮碎之日，運筹帷幄之中，決勝千里之处，元朝失之而亡天下，我朝得之而大一統，看将起来，畢竟還要讓他一着先手。『西湖一集』中『占慶云劉誠意佐命』大概已曾說過，如今這一回補前說未盡之事。」(附録図1を参照)

つまり、「先年」という言葉は単なる「先手」の誤りであるため、蘇氏の論証は成立できない。なお、周楞伽「『西湖二集』后記」(人民文学出版社1989)、陳晔平「『西湖二集』与『牡丹亭』」(1993 浙江大学学報)、代智敏「選本『西湖拾遺』与原作比較研究」などの論文にも同じく「先年」という誤りが踏襲されている。

中国で原本を入手することは比較的難しいと言っても、原本を見れば誰でも簡単に分かるはずだが、残念ながらこの点については管見の限りまだ誰も指摘していなかった。このため、蘇氏などが一集をめぐる議論の根拠である『西湖二集』巻十七の内容を誤って引用したので、誤った引用に基づく議論をしても意味はない。

3. 『西湖一集』の内容の推測

もし『西湖一集』があったとすれば、それはどんな本であろうか。そこで、筆者は「三言」の中の杭州に関する物語を調べてみた。

これらの物語は、杭州と深い関連性を持つ、当時周清原も知っているはずの小説なので、例えば、『警世通言』の二十八巻「白娘子永鎮雷峰塔」は中国四大民間伝説の一つに数えられるものであり、しかも舞台を杭州としたことで知られている物語であり、『西湖一集』に入れてもいいもの、むしろ入れるべきものである。この他にも、「三言」に見える杭州の典型的な人

物である柳永、蘇東坡、佛印、岳飛、秦桧などの故事は『西湖一集』の中に収められていたと考える方が自然である。

総じて、筆者は『西湖一集』は存在したが、早い段階で流通しなくなったため人の記憶から無くなったものであり、『西湖一集』が無くなった原因は『西湖佳話』との関連性にあると思う。

『西湖佳話』は16巻があり、その内容は表1のようである。

表1. 『西湖佳話』と『西湖二集』及び「三言」の比較

『西湖佳話』	主要人物	『西湖二集』	「三言」
葛嶺仙迹	葛洪		『喻』卷三十 明悟禪師趕五戒
白堤政迹	白居易		『警』卷二十八 白娘子永鎮雷峰塔
六橋才迹	蘇東坡		『喻』卷三十 明悟禪師趕五戒 『警』卷二十八 白娘子永鎮雷峰塔
灵隠詩迹	駱賓王 宋之間		『警』卷二十八 白娘子永鎮雷峰塔
孤山隠迹	林和靖		『警』卷二十八 白娘子永鎮雷峰塔
西泠韻迹	蘇小小		
岳墳忠迹	岳飛		『喻』卷三十二 游鄞都胡母迪吟詩
三台夢迹	于謙		
南屏醉迹	濟顛		
虎溪笑迹	辨才		
断桥情迹	文世高		
錢塘霸迹	錢鏐	卷一 吳越王再世索江山 卷八 寿禪師兩生符宿愿 卷十五 文昌司怜才慢注祿籍	『喻』卷二十一 臨安里錢婆留發迹 『喻』卷三十二 游鄞都胡母迪吟詩 『警』卷二十三 樂小舍拚生覓偶
三生石迹	圓沢 李源		『喻』卷三十 明悟禪師趕五戒
梅嶼恨迹	馮玄 (小青)		
雷峰怪迹	許宣 白娘子		『警』卷二十八 白娘子永鎮雷峰塔
放生善迹	蓮池		

この表を見れば、錢鏐の物語を除き、『西湖二集』は『西湖佳話』の内容と全然重複していないことが分かる。その内容は既に『西湖一集』に収められていたと考える方が自然であろう。

4. まとめ

以上論述したように、『西湖一集』は存在したと思う。その実物が現存している可能性は低いですが、小説史及び杭州の文化史を考察するためのヒントとして『西湖一集』の内容と形式を推測した。

その物語内容は白娘子や蘇東坡、岳飛など杭州の代表的な人物を中心に語る故事であり、そのうち一つの巻のタイトルは「占慶雲劉誠意佐命」である。『西湖一集』も『西湖二集』のように、二つの巻のタイトルが「対偶」の形になり、全部で四十巻左右偶数の巻である。文体は白話であるか文言であるかはまだ言い切れない。

そして、物語内容が『西湖佳話』と大体同じであったため、質のいい挿図を具えた『西湖佳話』に取って代わられ、早い段階で流通しなくなり、人の記憶から無くなったと思う。

第四章、錢鏐の物語

1. 概要

前表を見ればわかるように、「三言」、『西湖二集』、『西湖佳話』三者に共通して採録された話は錢鏐の物語のみである。特に『西湖二集』に錢鏐の物語を最初の巻にしたことは、錢鏐が杭州の代表的な人物であることを意味する。

さらに、『西湖二集』巻一「吳越王再世索江山」に、

皆様、およそ杭州人であれば、賢人君子であろうと、物売り、牧童であろうと、かの吳越王を褒め称えぬものはありません。奇々怪々なことであっても、何でも吳越王がどうのこうのどこじつけずにはおかないほどで、この英雄がそんじょそらの豪傑とは訳が違うのでございます⁷。

という表現から見れば、杭州人にとって、吳越王錢鏐の重要性が分かる。

現代でも六和塔などの仏塔を始めとする吳越時代の遺跡が、錢鏐の物語を今日まで伝承するうえで大きな役割を果たしてきたと思われる。『西湖遊覽志』の記述から、明代には仏塔など吳越時代の遺跡が数多く残っていたことが分かる。従って、明代の杭州人がそれを見て、錢鏐の杭州への歴史上の貢献を感じる事ができたのではないかと思われる。それが、『西湖二集』の第一巻に錢鏐の物語を配置した理由ではなかったか。

また、巻一「吳越王再世索江山」には以下の文書がある。

「然吳越王發蹟的事體，前人已都說過，在下為何又說？但前人只說得他出身封王的事，在下這回小説又與他不同，將前緣後故、一世二世因果報應，徹底掀翻，方見有陰有陽、有花有果、有作有受，就如算子一般，一邊除進，一邊除退，毫忽不差。」

「前人」はどのように物語を「語ったのか」について、資料⁸を確認した上、補足と比較を行う。

いうまでもなく錢鏐の話は作品によって違うが、『喻世明言』卷二十一「臨安里錢婆留発跡」の内容を元に、ほかの作品で補足して、作品中に取り込まれたエピソードを紹介しておこう。

<各エピソードの梗概>

「誕生異兆」：呉越王錢鏐は、唐末、杭州府臨安に生まれた。生まれた時種々の異兆があり、父はその怪異を嫌って殺そうとしたが、東隣の老婆が憐れんで助けた。それで幼名は婆留とつけられた。

「王者の風格」：幼少のころから、体格は人並みすぐれ、王者のように近隣の子供を集めては將軍よろしく指図していた。

「無頼・私塩」：青年時代には学問も農工商にも励まず、飲む、打つ、盗むの無頼の日々、私塩密売にも手を出したりした。

「親相」：義兄弟の契りを結んでいた鐘兄弟のもとで、異人を探しに来た術士廖生に帝王の気のあることを教えられ、臨安県録事鐘起の援助を受け、無頼の生活にピリオドを打った。

「黄巢を撃退」：董昌の軍に入り、黄巢の軍を撃退した。

「劉漢宏を撃退」：劉漢宏の軍を撃退した。

「董昌を誅伐」：越帝を称した董昌を斬った。

「呉越王」：呉越王に封ぜられ、杭州に居城を築き、呉越国九十八年の基礎を作った。

「羅隱」：才子と呼ばれる羅隱を自分の部下にした。

「衣錦帰郷」：故郷に戻って、地名を改め、老婆並びに、郷人に厚く恩賞を与え、故郷に錦を飾る。

「十四州・千年」：晩唐の詩僧貫休が、詩を献じて、錢鏐に面会を求めた。錢鏐はその詩中の一句「一劍霜寒十四州」の「十四」を「四十州」に改めたら会うと言った。貫休はそれを拒否する意の詩を残して立ち去った。鳳凰山で宮殿を造る時に、ある風水師が「鳳凰山に宮殿を作らば、百年のみ。もし西湖を平らげ、宮殿を作らば、千年の王気あり。」と提案したが、錢鏐が「国百年あらば、吾の願うところなり。」と言い、鳳凰山で宮殿を作った。

「治水・射潮」：钱塘江の潮を鎮めるために六和塔を建立した。矢を射て

逆流を鎮め、防潮のための堤防を築かせた。

「高宗に転生」：宋徽宗が夢で呉越王に会った。呉越王が「我が国土を返せ！」と叫び、宋徽宗は驚いて目を覚ました。皇后も同じ夢を見た。その時、韋妃が出産した報告があり、その子はのちの高宗である。高宗は呉越王の生まれ変わりであるため、彼も、杭州を都にし、杭州を安在とした。しかも、どちらも八十一歳まで生きた。

2. 内容の比較

錢鏐の物語は最初宋の『旧五代史』と『五代史記』に見られ、後にも筆記や小説によく引用された。高宗に転生したという物語は以下の作品にも記録された。内容はほぼ同じである。

宋・趙与時	『賓退録』	卷五
元・佚名	『宣和遺事』	「大觀二年」 ⁹
元・劉一清	『錢塘遺事』	卷一「夢吳越王取故地」

また、錢鏐の物語は元の筆記『南村輟耕録』などにも詳細に記録された。

錢鏐の物語については明・田汝成の『西湖遊覧誌餘』がほぼ『五代史記』に基づいて書かれたものである。『西湖夢尋』にも錢鏐の物語に触れているが、極めて簡素である。『喻世明言』と『警世通言』は錢鏐の物語を一番詳細に叙述したものである。『西湖二集』にも詳しく書かれているが、後で述べるように内容の配置は『喻世明言』と異なり、錢鏐を英雄化、神格化する傾向が見られる。『西湖拾遺』は『西湖二集』の内容を基に編集したものであるため、文字レベルまで『西湖二集』と一致しているが、幾つかのところには意図的な改変が行われていると考えられる。

A. 史書類

- 宋・薛居正等 『旧五代史』 卷百三十三 列傳
 宋・歐陽修 『五代史記』 卷六十七「吳越世家」第七
 明・胡宗憲等 『浙江通史』 卷二七九『吳越備史』「錢王射潮」

B. 小説類

- 宋・趙与時 『賓退録』 卷五
 元・佚名 『宣和遺事』 「大觀二年」
 元・劉一清 『錢塘遺事』 卷一「梦吳越王取故地」
 元・陶宗儀 『南村輟耕録』 卷十九 錢武肅鉄券
 明・田汝成 『西湖遊覽誌餘』 卷一、卷二「帝王都会」卷二十一
 「委巷叢談」
 明・張岱 『西湖夢尋』 「西湖南路」「錢王祠」
 明・馮夢龍 『喻世明言』 卷二十一「臨安里錢婆留發跡」
 卷三十二「游鄴都胡母迪吟詩」
 『警世通言』 卷二十三「樂小舍拚生覓偶」
 明・周清原 『西湖二集』 卷一「吳越王再世索江山」卷八
 「寿禪師兩生符宿愿」
 卷十五「文昌司怜才慢注祿籍」
 清・古吳墨浪子 『西湖佳話』 「錢塘霸跡」
 清・陳樹基 『西湖拾遺』 「錢王崛起吳越創雄藩」
- C. 民間故事類
- 1987 『山海經外編』 「錢王射潮」「錢江潮的来源」
 1989 『杭州市故事卷』 「錢王出世」「錢王妙計治錢塘」
 1991 『嘉興市故事卷』 「制龍王」「造錢塘」
 1989 『紹興市故事卷』 「担山和笠帽山」「小越」「平定董昌」
- D. 戲曲類
- 清・黃文暘等 『曲海總目提要』 卷二十八「金鋼鳳」(無名氏)

表 2. 錢鏐の物語の比較 (※無<極略<略<略詳<詳<極詳)

	A. 史書類		B. 小説類						C.	D.
	a 旧五	b 五代	c 誌餘	d 夢尋	e 三言	f 二集	g 佳話	h 拾遺		
誕生異兆	無	無	略	略	極詳	極詳	略	同 f	有	無
王者の風格	無	略詳	同 b	無	極詳	極詳	無	同 f		同 b
無頼・私塩	極略	略詳	同 b	極略	極詳	略	略	同 f	有	同 b
観相	無	極詳	同 b	無	極詳	詳	無	同 f		同 b
黄巢を撃退	極略	極詳 (二十)	同 b	極略	極詳 (三百)	極詳 (二十)	極詳 無	同 f (二千)		同 b
劉漢宏を撃退	略詳	極詳	極略	極略	極詳	極詳	極詳	同 f		同 b
董昌を誅伐	略	極詳	同 b	極略	極詳	極詳	極詳	同 f	有	同 b
呉越王	詳	詳	極詳	極略	略	極略	詳	同 f	有	同 b
羅隠	極詳	略	極詳	無	無	極詳	詳	同 f	有	無
衣錦帰郷	極詳	極詳	同 b	詳	極詳	極詳	極詳	同 f		無
十四州・千年	無	無	無	詳	極詳	極詳	極詳	同 f		無
治水・射潮	無	無	無	極略詩	極詳	極詳	極詳	同 f	有	略
高宗に転生	無	無	極詳	無	極詳	極詳	無	同 f		無

表 2 にも示したように、史書、野史、筆記だけではなく、明から清にかけての伝承をまとめたような形で、錢鏐を主人公とした作品が短編小説集の一作品として次々と刊行された。現存するのは、明・馮夢龍撰『喻世明言』巻二十一「臨安里錢婆留発跡」、明・周清原撰『西湖二集』巻一「呉越王再世索江山」、清・古吳墨浪子編『西湖佳話』「錢塘霸跡」、清・陳樹基編『西湖拾遺』「錢王崛起呉越創雄藩」の四編である。

この四編の内容を比較することで、『西湖二集』の特徴が分かる。

2.1. 卵袋

『西湖二集』とほかの三篇と比べてみると同一の物語内容を有しながら、杭州における錢鏐への信仰を示すエピソードを更に付け加えている。以下、その一つを示す。

さて、ここに一つ傑作な笑い話が御座います。かの宝石山の

麓の石に一斗ばかりの大きさの鑿で刻んだ跡が御座いまして、これはいやはや何と呉越王の鞏丸の跡だというので御座います。かつて、呉越王が未だ世に出ない時期に塩の行商を営んでおりまして、塩を天秤にと担いで宝石山までやって参りますと、あいにくの大雨で足を滑らせすってんころりん、その拍子に石に鞏丸の跡がついてしまったので御座います。後に、杭州のおふざけの好きな人がわざわざ鑿で跡を一斗大にまで広げてしまいました。そして大雨の後、雨水がたまるや田舎の愚民たちに「この鞏丸池の水で目を洗えば一年は目を悪くすることはない。」とだましたので御座います。田舎の愚民たちはそれを信じて、本当にこの鞏丸池の水で目を洗ったそうで、杭州の人々の悪ふざけはいつもこんな風なのです。これはとても面白いことではないでしょうか！¹⁰

これに続けて、物語の語り手は呉越王がこの地域の人々を戦から救い、後世の人から英雄として崇拝されるようになったがために、その悪ふざけによるでっちあげすら信仰の対象になったことを述べている。

このエピソードは『西湖二集』にしかみられない。『西湖二集』の内容をほぼ完全に受け続けた『西湖拾遺』においてもこの内容を削除した。それは『西湖拾遺』の編集者である陳樹基がこの内容が下品であると思い、意図的に編集したと考えられる。

ほかのところにはこの内容について一切記録されていないことから見れば、相当ローカルな話であることが分かる。文書のニュアンスから見れば、悪ふざけをする杭州人を批判せず、逆に純朴な田舎の人々のことを「愚民」と言い、嘲笑した。これが杭州人である周清原が話を面白くする努力、また、「帝都」の人としての優越感を表したと思う。このような杭州人としての優越感は同時代の他の作品にも見られる。「三言」にも杭州人に対する評価が幾つあり、その中代表的なのは『警世通言』巻二十八「白娘子永鎮雷峰塔」の中で青青が言ったセリフ「娘子愛你杭州人生得好」の一句である。

また、後で詳しく述べるが、このエピソードから呉越王錢鏐の「巨人神」

という性質を暗示したと考えられる。

2.2. 無頼

錢鏐の青年時代の無頼な生活について、「臨安里錢婆留発跡」は四分の一以上（約 4500 字/全篇 17000 字）の篇幅で詳しく叙述したことに對して、『西湖二集』の方が四十分の一ぐらいであり、明らかに省略したことが分かる。（約 350 字/全篇 12000 字）

『西湖二集』の内容をもっと具体的にしてみると、

「後來長大成人，相貌魁梧，膂力絶人，不肯本分營生，專好做那無頼之事。有『西江月』為證：

本分營生不做，花拳繡腿專工，棍槍呼喝騁英雄，說著些兒拈弄。

鬻販私鹽活計，貝戎不恥微蹤，骰盆六五叫聲凶，破落行中真種。

話說錢公貧窮徹骨，鬻販私鹽，挑了數百斤鹽在肩上，只當一根燈草一般，數百人近他不得，以此撒潑做那不公不法之事。但生性慷慨，真有一擲百萬之意。在賭博場中，三紅四開，一擲而盡，他也全不在心上，以此人又服他豪爽。（錢鏐はとても貧乏で、私塩密売に手を出しました。天秤棒で数百斤の塩を肩に担っても、まるで一本の灯心くらいにしか感じないように、数百人でも彼には敵わないのです。そして、不法なこともしました。しかし、彼の性格はとても豪放で、千金を投ずることを惜しみません。ばくち場で、乾坤一擲の勝負をして、お金が全部無くなったとしても、彼は全然気にしません。だから、彼の豪快さに人々は感服したのです。）」

という内容があり、無頼ということは避けられなくても、「豪放」や「思い切りがよい」、「豪快」などプラスな表現で高く評価していることが分かる。これも周清原が意図的に錢鏐を美化したと考えられる。

2.3. 黄巢

錢鏐が「発跡」するきっかけとなった最初の戦役は唐乾符年間の黄巢軍との戦いであるため、全ての作品にはある程度に触れられており、モチーフはどちらもほぼ同じである。唐乾符年間に黄巢の乱があり、その反乱軍が浙東に攻めてきた。錢鏐は敵の数が圧倒的に多いため、「奇兵」の策を提案した。そして少人数の部隊を率い、地形を上手く利用して、結局、大人数の黄巢軍を倒した。

この戦役について、特に、『五代史記』、『西湖遊覽誌餘』、「臨安里錢婆留発跡」、『西湖二集』、『西湖拾遺』にはいずれも詳しく記録している。筆記と小説は『五代史記』などの史実に基づいてはいるものの、其々、具体的な内容についてはその記述は異なっている。以下、その差異を比較してみた。

まず、『西湖遊覽誌餘』は『五代史記』と完全に同じなので、便宜上一つに合併して比較する。また、『西湖二集』と『西湖拾遺』は大体同じなので、一つにまとめる。そうすると、大体は以下の三つのグループに分けられる。

- A. 『五代史記』、『西湖遊覽誌餘』
- B. 「臨安里錢婆留発跡」
- C. 『西湖二集』、『西湖拾遺』

以下はそれぞれの内容である。

A.

唐乾符二年，浙西裨將王郢作亂，石鑑鎮將董昌募鄉兵討賊，表鏐偏將，擊郢破之。是時，黃巢眾已數千，攻掠浙東，至臨安，鏐曰：「今鎮兵少而賊兵多，難以力禦，宜出奇兵邀之。」乃與勁卒二十人伏山谷中，巢先鋒度險皆單騎，鏐伏弩射殺其將，巢兵亂，鏐引勁卒蹂之，斬首數百級。

B.

話說唐僖宗乾符二年，黃巢兵起，攻掠浙東地方，杭州刺史董昌，

出下募兵榜文。

……

不一日，探子報導：「黃巢兵數萬將犯臨安，望相公策應。」董昌就假錢鏐以兵馬使之職，使領兵往救。問道：“此行用兵幾何？”錢鏐答道：“將在謀不在勇，兵貴精不貴多。願得二鐘為助，兵三百人足矣。”董昌即命錢鏐於本州軍伍自行挑選三百人，同鐘明、鍾亮率領，望臨安進發。

到石鑑鎮，探聽賊兵離鎮止十五里。錢鏐與二鐘商議道：“我兵少，賊兵多；只可智取，不可力敵：宜出奇兵應之。”乃選弓弩手二十名，自家率領，多帶良箭，伏山谷險要之處。先差砲手二人，伏於賊兵來路，一等賊兵過險，放炮為號，二十張強弓，一齊射之；鐘明、鍾亮各引一百人左右埋伏，準備策應；餘兵散在山谷，揚旗吶喊，以助兵勢。

分撥已定，黃巢兵早到。原來石鑑鎮山路險隘，止容一人一騎。賊先鋒率前隊兵度險，皆單騎魚貫而過。忽聽得一聲炮響，二十張勁弩齊發，賊人大驚，正不知多少人馬。賊先鋒身穿紅錦袍，手執方天畫戟，領插令字旗，跨一匹瓜黃戰馬，正揚威耀武而來，卻被弩箭中了頸項，倒身顛下馬來，賊兵大亂。鐘明、鍾亮引著二百人，呼風喝勢，兩頭殺出。賊兵著忙，又聽得四圍吶喊不絕，正不知多少軍馬，自相蹂踏。斬首五百餘級，餘賊潰散。

C.

黃巢遣賊將王仙芝領兵五千，冠掠浙東，勢如風雨而來。……

後來王仙芝領大隊人馬殺來，逢州破州，逢縣破縣，浩浩蕩蕩，將到臨安地方。董昌面色如土，眾兵都面面廝覷，不敢則聲。錢公道：「如今鎮兵甚少，賊兵甚多，難以力敵，須出奇兵方可取勝。」眾兵懼怕賊人，誰敢向前。錢公自領敢死之士二十人，預先埋伏在山谷之中。黃巢先鋒行於山石險峻之處，只得單騎而行。錢公大喝一聲，二十張弓一齊射去，先鋒從馬上倒墜下地。錢公突出，一勇

當先，殺人如砍瓜切菜，共斬五六百首級。

まず、ここで、戦役の人数などについて比較したい。

表 3. 黄巢軍との戦いの人数の比較

	兵隊人数	敵数	殺敵数
A. 『五代史記』、 『西湖遊覧誌餘』	二十	数千	数百
B. 「臨安里錢婆留發跡」	三百	数万→前隊（数千と推定）	五百余り
C1. 『西湖二集』	二十	五千	五六百
C2. 『西湖拾遺』	二千	五千	五六百

「臨安里錢婆留發跡」では敵の兵力は明記されていないが、「斬首すると五百餘」とあるからには『五代史記』と同様に数千人とすべきであろう。

表 3 を見ればわかるように、敵の人数と倒した敵の人数はどちらもあまり変わらないが、面白いことは錢鏐が率いた部隊の人数だ。

『五代史記』には二十人と書かれており、『西湖遊覧誌餘』もそのまま踏襲しているが、「臨安里錢婆留發跡」では三百人に変更され、その中、錢鏐が率いた肝心の二十人の弓兵部隊以外、鐘明と鍾亮二人の隊長が其々百人を率いており、また鉄砲兵二人、おとりとしての部隊もいた。戦略と戦闘の流れも比較的詳細に描写した。この幾つかの史書、筆記、小説の中で一番合理的な説明をしていると思う。

しかし、『西湖二集』はこのような変更を受け入れなかった。錢鏐が二十人を率いたと設定している上に、獅子奮迅、一騎当千の場面を描いた。これはまるで人間ではなく、神のような存在だと見える。「臨安里錢婆留發跡」のように錢鏐は人間である前提でストーリーの合理性を求めると正反対に、錢鏐を神格化している傾向がある。

さらに、清・陳樹基の『西湖拾遺』では、『西湖二集』とほぼ一致しているのに、「二十」を「二千」に改めている。これは『西湖二集』の僅か二十人で数千の敵に勝つという設定はあまりにも人間離れしてあり得ないと考え、変更をしたのではないかと思われる。

だから、錢鏐が二十人を率いたという設定を守り、しかも自ら大人数の

敵陣に入り、敵を撃破した描写を入れた周清原が意図的に錢鏐を神格化したことは明らかになり、これは他の作品にない特色とも言える。

2.4. 貫休

貫休についての主な内容は以下のようだ。

晩唐の詩僧貫休が詩を献じて、錢鏐に面会を求めた。錢鏐はその詩中の一句「一劍霜寒十四州」の「十四州」を「四十州」に改めたら会うと言った。貫休はそれを拒否する意の詩を残して立ち去った。

これは宋代から明までの筆記によく見られる。譚正壁氏の『三言兩拍資料』によれば、貫休の物語は以下の作品に記録されている。

宋・尤袤	『全唐詩話』 卷六	「僧貫休」
宋・計有功	『唐詩紀事』 卷七十五	「僧貫休」
明・郎瑛	『七修類稿』 卷三十四詩文類	「禪月大師」

『七修類稿』における貫休についての内容は以下である。

(前略) 初め詩を呉越王に投じて曰：

“貴逼身來不自由，龍驤鳳翥勢難收
滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州。
萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞
他年名上凌煙閣，豈羨當時萬戶侯。”

王之に語りて曰：“詩則ち美き矣，若能く改めて四十州と作さば，當に相見を得るべし。”師喟然曰：“州添える可からず，詩亦改むる可からず。孤雲野鶴，何の天之飛ぶ可からざる耶？”杖錫を遂り之を去る¹¹。

この他に管見では以下の筆記にも見られるので補足しておく。

『續湘山野錄』	宋・文瑩 ¹²
『南村輟耕錄』	元・陶宗儀 ¹³
『舌華錄』	明・曹臣編 ¹⁴
『西湖遊覽志餘』	明・田汝成 十四卷「方外玄踪」 ¹⁵

なお、『七修類稿』も含めて『續湘山野錄』や『南村輟耕錄』、『舌華錄』、『西湖遊覽志餘』のいずれも貫休は詩を残して立ち去って蜀に入ったということを記録するにとどめている。

しかし、筆記などの内容を受けながら、「三言」は貫休が立ち去った後、錢鏐が後悔したことを明記し、また錢鏐を諷する詩を入れ、錢鏐は器量が狭くて身の程知らずというマイナス評価をした。

『喻世明言』卷二十一

貴逼身來不自由，幾年辛苦踏山丘。滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州。

萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞。他年名上凌雲閣，豈羨當時萬戶侯？

這八句詩，乃是晚唐時貫休所作。那貫休是個有名的詩僧，因避黃巢之亂，來於越地，將此詩獻與錢王求見。錢王一見此詩，大加歎賞！但嫌其“一劍霜寒十四州”之句，殊無恢廓之意。遣人對他說，教和尚改“十四州”為“四十州”，方許相見。

貫休應聲吟詩四句。詩曰：

不羨榮華不懼威，添州改字總難依。

閒雲野鶴無常住，何處江天不可飛？

吟罷，飄然而入蜀。錢王懊悔，追之不及（錢鏐が後悔して、貫休を追いかけましたが、及びませんでした。）。真高僧也。

後人有詩譏誚錢王云：“文人自古傲王侯，滄海何曾擇細流？一個詩僧容不得，如何安望添州？”此詩是說錢王度量窄狹，所以不能恢廓霸圖，止於一十四州之主（錢鏐の器量が狭いので領土を広げることができず、十四州までに止まりました。）。

これに対し、『西湖二集』では貫休を肯定していると同時に、錢鏐についても否定的な評価をしていない。むしろ、錢鏐がよく自分のことを知り、安心立命の境地にあったとプラス評価している。

『西湖二集』卷一「吳越王再世索江山」

那時吳越王共有十四州江山。一時文武帥之士，都是有名之人。先前有個貫休和尚作一首詩來獻道：

貴逼身來不自由，幾年辛苦踏出丘。
滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州。
萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞。
他年名上凌雲閣，豈羨當時萬戶侯。

吳越王見了此詩甚喜，遣門下客對他道：“教和尚改十四州為四十州，方許相見。”貫休道：“州亦難添，詩亦難改，聞雲孤鶴，何天不可飛耶？”遂不見而去。以此見貫休和尚之高也（遂に会わずに去ってしまいました。これには貫休和尚の高徳が見られません。）。

吳越王要造宮殿於江頭鳳凰山，有個會看風水的道：“如在鳳凰山建造宮殿，王氣有限，不過有國百年而已；如把西湖填平，開十三條水路以蓄洩湖水，建宮殿於上，便有千年王氣。”錢王道：“豈有千年而天下無真主者乎？有國百年，吾所願也。（錢鏐は「千年経っても天下に真の主がないことがあるだろうか？国が百年続くこと、それが私の願うところだ。」と言いました。）”遂定都鳳凰山。

つまり、貫休の物語については、モチーフはほぼ同じだが、錢鏐への評価は半分違う。宋元明の筆記には特に錢鏐を評価していなかったが、「三言」は錢鏐が後悔したことを明記し、器量が狭くて身の程知らずというマイナス評価だが、『西湖二集』は逆に錢鏐がよく自分のことを知り、安心立命の境地にあったとプラス評価している。

このような評価が全く異なることは羅隱の物語にも似ているケースが見られる。

唐・孫光憲『北夢瑣言』卷五

困難の世において、君子が不幸に遭遇することは往々にある。

唐進士の章魯封と羅隱はその名を併称されていた。皆浙中出身で、何度も科挙試験を受け合格しなかったものの、名声は甚く高かった。錢鏐は土豪から身を起こし、錢塘八都を領し、董昌を撃破し、杭越を取った。章・羅の両名は彼の統治下に組み込まれた。然し、彼は草莽からの出身で、物事を知悉せず、県宰（官職名）を重視し、郎官（官職名）を軽蔑する。嘗て曰く：「某は才能を持たず、郎官にはなれるが、県令には堪えない。」即ち分かるのだ。章魯封を表奏孔目官（官職名）に封じたが、章はそれを拒絶したので笞刑に処された。また羅隱を錢塘の県宰にさせた。皆は死を畏れて受命したのだ。章・羅はそれを恥と思いが、錢鏐はそれは光栄であると思い任命した。玉石もろともに亡びた。あたり惜しいことだ！¹⁶

『北夢瑣言』の記録によれば、章魯封や羅隱などの文人は無頼出身の錢鏐の下に務めることを恥であると論じ、章魯封はその任命を拒否することで錢鏐に殺された。『北夢瑣言』の作者はこれは「不幸」なこと、「あたり惜しいこと」であると議論じ、章魯封や羅隱に同情した。

『西湖二集』において関連する内容は巻一と巻十五にある。以下はその内容である。

『西湖二集』巻一「吳越王再世索江山」

那時羅隱才子為錢塘知縣，勸錢王舉兵討梁太祖。錢王笑道：
“吾不失為孫仲謀。”（羅隱は錢鏐に出兵して梁太祖を討伐することを勧めました。錢鏐は「吾は孫権たるを失はず。」と笑って言いました。）不肯舉兵，遂受梁太祖之命。

『西湖二集』巻十五「文昌司怜才慢注禄籍」

誰知後來朱溫竟篡了唐朝天下，錢王上表稱臣，朱溫大喜，加封他為吳越王，賜以玉帶名馬。羅隱甚是不服，勸錢王起兵道（羅隱は甚く不服で、錢鏐に出兵することを勧めました。）：“朱溫逆賊，篡奪唐朝天下，弑君之賊，人人得而誅之，即當興兵十萬以討

逆賊，復立唐室子孫，名正言順，何愁不勝！就使不勝，我據有江東吳越十四州天下，不失為東帝。怎生上表稱臣，以為終古之羞乎？”錢王道：“我若興兵，畢竟要塗毒生靈。我愛養斯民，豈忍置之鋒鏑之地？況朱溫貪姪之極，不久必有內變，我靜以觀其變，自不失為孫仲謀也。”遂不肯起兵。錢王聽羅江東這秋說話，心中甚是敬重，暗暗的喝采道（（錢鏐は）心の中で甚く羅隱のことを尊敬し、心のうちで密かに喝采しつつ思いました。）：“羅隱在唐朝屢舉不第，心中不知該怎麼樣怨恨唐朝，今反勸我起兵復興唐室，唐朝雖負羅隱，羅隱卻不負唐朝，可謂忠心貫日，唐朝之義士矣！'文人無行'，此言謬也。”自此更加禮敬，凡事聽信（此れから（錢鏐は）羅隱のことを更に尊敬し、凡ての事について羅隱の意見を信ずることにしました。）。

錢王英雄生性，發怒之時，未免有些偏駁。那時桐廬有個才子章魯風，不願仕於錢王幕下。錢王大怒，就把章魯風來殺了。又有關中一個才子吳仁璧，錢王聘他為官，吳仁璧甚是不服，飲酒之間，做首詩規諫道：

一個禰衡容不得，思量黃祖謾英雄。

錢王見這首詩，甚是懊悔，遂將此二人屍首埋葬之以禮（錢鏐はこの詩を見て、甚く後悔して、そして此の二人の死体を礼に従って埋葬しました。）。

那時西湖上漁戶日納魚數斤，名為“使宅魚”，若不及正烽，必另買來補數，頗為民害。一日，錢王與羅江東飲酒，壁上掛幅姜太公磻溪垂釣圖，錢王要羅江東題詩，遂題詩以寓意道：

呂望當年展廟謨，直鉤釣國更誰知？

若教生在西湖上，也須供應使宅魚。

錢王見詩大笑，遂蠲免了“使宅魚”這注徵稅。

羅江東隨事諷諫，錢王無有不聽，都是有益於國家，有利於民生的事。錢王發怒之時，無人阻攔得住，獨羅江東三言兩語便撥得轉，因此吳、越十四州都蒙其福德。（羅隱は事があれば諫言し、

錢鏐は聴かないことはありません。それは全部国家や民生に有利なことでした。錢鏐が怒った時、誰も止められません、ただ羅隱だけは二言三言で錢鏐の怒りをときました。此れに因り、呉・越十四州はみなその福德を蒙りました。）

『西湖二集』では、章魯封（章魯風）を殺したことについては錢鏐が悔いを残したと表現されている。また、羅隱は錢鏐の下で積極的に務め、助言したり、諫言したりもする。錢鏐の下で務めることについて、羅隱の抵抗とか不満とかは全く見られない、むしろ積極的に助言したと考えられる。そして、錢鏐も羅隱を忠臣義士と見なし、彼の意見をよく採納した。この二人が国家や民生に有利なことをし、呉越の民衆から敬愛されるという評価だった。後で詳しく述べるが、錢塘江、西湖の治水などに力を入れた錢鏐の統治は決して悪くなかったということから、杭州人である周清原には錢鏐に感謝したい気持ちがあり、その結果として、このように錢鏐を意図的に美化したのではないかとも思われる。

2.5. 治水・射潮

鈴木陽一氏が「浙東の神々と地域文化」に述べたように、歴史上の錢鏐政権が錢塘江、西湖の治水を大変重視していた。治水政策が彼の政権を安定させ、わずか三代のうちに杭州の周辺に経済的繁栄をもたらした。そうした彼の治水の事績が、水に依拠し水に苦しむ杭州の人々をして、錢鏐を歴史上の人物に終わらせず、神として信仰の対象とさせた要因の一つと考えられる。

また、呉越国の三代を通して、仏教が篤く信仰され、保俶塔、雷峰塔、六和塔など仏塔が数多く建立されたことも注目されよう。この時代の塔の殆どは現存しないが、全てランドマークとして重要な場所に建立されたもので、そうした場所に建立された多くの塔は洪水などを鎮めるためのものであると考えられていた。こうした鎮水、鎮魂に結び付く塔の存在も、錢鏐を神格化する一つの要因であった。『西湖二集』には錢鏐の治水について、

錢塘江の潮を鎮めるために六和塔を建立したとしか書かれていない。錢塘江に防潮堤を築き洪水を防ぎ、西湖を浚渫して飲料・農業用水を確保したり、錢塘江から杭州城内に水を引き込み運河の水量を安定させたりする人間がした治水政策の記述を省略した一方、宗教色彩の濃い鎮水塔を建立したこののみを書くのは、錢鏐の歴史上の人物としての形象を弱め、神格を強調するためと考えられる。

さらに、「射潮」の物語はその神格をより強める役割を果たしている。

『喻世明言』卷二十一「臨安里錢婆留發跡」：

「其年大水，江潮漲溢，城垣都被沖擊。乃大起人夫，築捍海塘，累月不就。錢鏐親往督工，見江濤洶湧，難以施功。錢鏐大怒，喝道：“何物江神？敢逆吾意！”命強弩數百，一齊對潮頭射去（數百の強い弩を使って一斉に潮に向かって矢を射るように命じました。）、波浪頓然斂息。不勾數日，捍海塘築完，命其門曰候潮門。」

『西湖二集』卷一「吳越王再世索江山」：

「那時江潮極是厲害，潮頭有數十丈之高，如山一般擁塞將來，海塘屢築屢壞。錢王大怒，叫三千犀甲兵士待潮頭來時施放強弩，搖旗播鼓，吶喊放銃；又禱於胥山祠，為詩一章道：“為報龍王及水府，錢江借取築錢城。”將詩投於江內。又建六和塔以鎮風潮，親自取鐵箭以射潮頭（錢鏐が）自ら鉄の矢を取って潮を射ました。）、果然潮頭漸漸退縮，東擊西陵。海塘一築而就。凡今之平地，即昔時之江也，為杭州千古之利。至今有鐵箭巷，為錢王射潮之所，仍有大鐵箭出於土上，長四五尺，牢不可拔，其大如杵，真神物也！（大きい鉄の矢が地上に出ており、長さは四五尺もあり、牢として抜かず、其の太さは杵の如く、真に不思議な物です！）」

『西湖二集』と「三言」ともに、矢を射て逆流を鎮め、防潮のための堤防を築かせたエピソードを有するが、前者では配下に命じて矢を射させるのみなのに対して、後者では錢鏐自ら巨大な鉄の矢を射て逆流を鎮めており、錢鏐に対して神佑があるというレベルから一步進んで、彼自身を神と

する傾向が一層進んでいる。そして、錢鏐が使った巨大な矢の描写も錢鏐の「巨人神」という性質を暗示していると思われる。前述したように「卵袋」の物語とともに巨人神のことを暗示している。

この「巨人神」の性質は民間故事である①『杭州市故事巻』「錢王射潮」や②『嘉興市故事巻』「制龍王」、③『紹興市故事巻』「担山和笠帽山」などにも見られる。

①潮神を鎮めるために一万の弓の名手を手配したのだが一向に岸边にやっこない。というも、岸边に来るには寶石山を通らなくてはならないのだが、この山間の道が狭くて一人ずつしか通れないのだ。このままでは大変だと思った錢鏐は寶石山に馬で駆けつけ、山の南側の裂け目を一蹴り、たちどころに山は裂け、広い道が出来上がり、弓の射手たちは無事間にあった。(『杭州市故事巻・上』所収「錢王射潮」 pp. 37-38)

②ある年、錢塘江に一人の巨人がやっこ来た。この巨人は本当に体が大きく、錢塘江のこちら岸から向こう岸まで一またぎであった。みんなはこの巨人の名前など知らないものだから、錢塘江の一字をとって錢大王と呼んでいた。この大王は力も強く、自分で天秤を担いで大きな石を運んできて、やがて次から次と大小さまざまな石の山を築いてしまった。(『嘉興市故事巻』所収「制龍王(二)」 pp. 44-45)

③錢大王は思った。二つの大きな山を運んできて、逆流を起こす潮神を押さえ込み、永遠に鎮めてしまおう。そこで大王は本当に二つの山を天秤で担ぎ、海へ運んでいって潮神をやっつけようとした。(『紹興市故事巻』所収「担山和笠帽山」 pp. 89-90)

錢鏐が巨人神となった原因は鈴木陽一氏が既に「浙東の神々と地域文化」

に論述しているように、錢鏐が民間で信仰されていた、水と関わりの深い巨人神防風の形象を受け継いだのである。

呉王夫差に対して、或いは越に対して恨みを呑んで死んだ伍子胥が錢塘江の逆流を起こす神となった。これを鎮めるために錢塘江に面し、呉越の境界である呉山に廟を建てて祀った。しかし、本来防風を治水の神とする越の地域では伍子胥を鎮水、鎮護の神とするには至らず、呉越王錢鏐が神となった時点では、錢鏐に鎮められる神格となった。また、錢鏐は神格化される過程で、越において古代から信仰されてきた防風の巨人、治水の神としての形象を受け継ぐこととなったのである。

そのほか、誕生の異兆や術士の予言などのエピソード、全部は錢鏐の神格化と繋がっていると思う。

3. まとめ

錢鏐の物語について、史書・筆記・小説などを比較することで、他の作品と異なり、『西湖二集』は錢鏐を英雄化、神格化する傾向が見られることが明らかになった。これは『西湖二集』の特徴の一つであると思う。

そして、作品によって程度がやや異なるが、錢鏐信仰は昔から伝承してきたことも分かった。そもそも錢鏐への信仰の基礎は、彼の治水の施策そのものにあるが、更に防風という治水の巨人神の性格を引き継ぎ、神として豊かな形象をもって人々の信仰を集めた。この錢鏐信仰は杭州人にとってどう理解すべきか、錢鏐文化は現代の杭州にどんな影響があるか。これは今後の課題の一つと思う。

周清原が錢鏐を杭州の代表人物として紹介することにどまらず、錢鏐を高く評価し、美化しなければならなかった理由は何だろうか。それには洪武帝朱元璋の史実或いは物語とも関係があると思う。

民間故事『嘉興市故事卷』所収「制龍王（一）」と前文に引用した「制龍王（二）」においては錢大王（錢鏐）と朱元龍（朱元璋）がほぼ同じモチー

フの故事に登場している。このことから、民間信仰の中には錢鏐＝朱元璋と捉えられていると考えられる。とりわけ、錢鏐への英雄崇拜という要素は洪武帝についても同じような傾向が濃厚に見られる。『西湖二集』巻一において、錢鏐の物語をする前に、故事の内容とは関係ないのに、洪武帝を賛美する内容を入れたのもおそらくは同じ理由である。

洪武帝（朱元璋）を神格化する「洪武崇拜」は『西湖二集』の他の箇所でも頻繁に見られる。

まず、内容的に、全書には洪武帝を賛美する部分が沢山ある。「三言」の合計 120 巻の中でも「洪武爺」という用語が三か所しか見えないのに対して、表 4 を見ればよく分かるように、34 巻の『西湖二集』の中で「洪武爺」が 172 箇所もあり、頻繁に使われている。

また、書式においては、原刊本を見ると、洪武帝と永楽帝の前に空白コマを二つ入れるという特別扱いも見られる。これが作者である周清原の意図であるか出版側の意図であるかはまだ不明だが、内容的に洪武帝を特別扱いしたのは作者の周清原であることは間違いがないので、形式的に特別扱いしたのも作者の方の可能性が高いと思う。

表 4. 『西湖二集』の「○○爺」

前に入れたコマ数	○○爺	数
2	洪武爺	172
2	永楽爺	26
1	成化爺	30
1	正統爺	10
1	建文爺	8
1	天順爺	7
1	景泰爺	6
1	弘治爺	4
1	嘉靖爺	1
1	万历爺	1

これは魯迅氏に批判された「皇帝の徳を頌する」ということであるが、周清原の政治抱負も見えるのではないだろうか。

前述したように、周清原は才を抱けども恵まれず、出世しようとしても明末の不安混乱の時期なので出世できなかった。彼は官僚の腐敗、科挙試験の黒幕などはもう飽きるほど体験してきた。現世への失望・絶望は彼を過去の洪武盛世、心の中の憧れの「帝都」杭州という小説の世界に追い詰めた。小説を書くことで、彼は胸の中のさまざまな気持ちを書き出し、胸一杯の不満の気持ちと鬱々たるやるせなさを晴らしたいのだ。このような出世心を持つ周清原は現実への失望の反動として洪武帝を賛美し、現世も明初期になるようにと期待する。そのような「理想的」な社会を作るために、もっと彼のような才能のある文人を官僚にしてほしいというのは彼の本音だろう。だから、彼は小説の中で官僚や科挙制度を批判しながら、あらゆる形で自分の才能をアピールした。「威將軍水兵篇并海防図式」や「緊要海防説并救荒良法数種」など独特な内容と形式も彼が人の注意を呼んでいる努力である。

また、前述のように宋高宗は錢鏐の生まれ変わりであると言われており、形象の面で、宋高宗＝錢鏐と考えられていることが分かる。そうすると、イメージの上で、宋高宗＝錢鏐＝朱元璋が重なっていたと考えられるため、小説の舞台となった杭州（臨安）は小説の中で明という時代と設定されたとしても、実際は宋の臨安を描写している、あるいはその逆、宋代の臨安であるという設定だが、実際は作者が生きている明代の杭州を描いていることが多いという現象の原因の一つであるかもしれない。

終わりに

錢鏐の物語について、史書・筆記・小説などを比較することで、他の作品と異なり、『西湖二集』は錢鏐を英雄化、神格化する傾向が見られることが明らかになった。これは『西湖二集』の特徴の一つであると思う。

周清原は錢鏐を杭州の代表人物として紹介するにとどまらず、錢鏐をそんなに高く評価したり、美化したりした理由は洪武帝朱元璋の史実或いは物語とも関係があると指摘した。

錢鏐への英雄崇拜という要素は洪武帝についても同じような傾向が濃厚に見られる。前述したように、周清原は才を抱けども恵まれず、出世しようとしても明末の不安混乱の時期なので出世できなかった。彼は官僚の腐敗、科挙試験の黒幕などはもう飽きるほど体験してきた。現世への失望・絶望は彼を過去の洪武盛世、心の中の憧れの「帝都」杭州という小説の世界に追い詰めた。小説を書くことで、彼は胸の中のさまざまな気持ちを書き出し、胸一杯の不満の気持ちと鬱々たるやるせなさを晴らしたいのだ。このような出世心を持つ周清原は現実への失望の反動として洪武帝を賛美し、現世も明初期のようになることを期待する。そのような「理想的」な社会を作るために、もっと彼のような才能のある文人を官僚にしてほしいというのは彼の本音だろう。だから、彼は小説の中で官僚や科挙制度を批判しながら、あらゆる形で自分の才能をアピールした。「威將軍水兵篇并海防図式」など独特な内容と形式も彼が人の注意をひくための努力である。

錢鏐信仰は昔から伝承されてきたことも分かった。そもそも錢鏐への信仰の基礎は、彼の治水の施策そのものにあるが、更に防風という治水の巨人神の性格も引き継ぎ、神として豊かな形象をもって人々の信仰を集めた。この錢鏐信仰は杭州人にとってどう理解すべきか、錢鏐文化は現代の杭州にどんな影響があるのか。これは今後の課題の一つと思う。

最後に、何分にも中国古典文学を専門としなかった者が書いたので不適切な所があるかもしれない、諸々の至らない点をご寛容下さるようお願いする次第である。

参考文献

一、古書類

- | | |
|--------|-----------|
| 東漢・許慎 | 『説文』 |
| 唐・孫光憲 | 『北夢瑣言』 |
| 宋・歐陽修 | 『五代史記』 |
| 宋・趙与時 | 『賓退録』 |
| 宋・文瑩 | 『續湘山野録』 |
| 宋・吳自牧 | 『夢梁録』 |
| 宋・薛居正等 | 『旧五代史』 |
| 宋・耐得翁 | 『都城紀勝』 |
| 宋・西湖老人 | 『西湖老人繁勝録』 |
| 宋・周密 | 『武林旧事』 |
| 元・陶宗儀 | 『輟耕録』 |
| 元・佚名 | 『宣和遺事』 |
| 元・刘一清 | 『錢塘遺事』 |
| 元・陶宗儀 | 『南村輟耕録』 |
| 明・宋濂等 | 『元史』 |
| 明・楊士奇等 | 『太祖實録』 |
| 明・洪楩 | 『西湖三塔記』 |
| 明・田汝成 | 『西湖遊覽誌』 |
| 明・田汝成 | 『西湖遊覽誌餘』 |
| 明・馮夢龍 | 『喻世明言』 |
| 明・馮夢龍 | 『警世通言』 |
| 明・馮夢龍 | 『醒世恒言』 |
| 明・馮夢龍 | 『情史類略』 |
| 明・馮夢龍 | 『情史』 |
| 明・李昌祺 | 『剪灯余話』 |
| 明・凌濛初 | 『初刻拍案驚奇』 |
| 明・凌濛初 | 『二刻拍案驚奇』 |

明・沈国元	『皇明从信録』
明・陸人龍	『型世言』
明・西湖漁隱主人	『歛喜冤家』
明・瞿佑	『剪燈新話』
明・胡宗憲等	『浙江通史』
明・曹臣編	『舌華錄』
明・郎瑛	『七修類稿』
明・張岱	『西湖夢尋』
明・葉盛	『水東日記』
明・餘繼登	『典故紀聞』
清・談遷	『北遊録』
清・古吳墨浪子	『西湖佳話』
清・陳樹基	『西湖拾遺』
清・李鼎	『西湖小史』
清・古吳墨浪子	『通俗西湖佳話四卷』
清・朱彭	『西湖遺事』
清・湖上笠翁	『湖上嘉話』(別名『西泠故事傳奇』)
清	『明史』
清・李衛	『西湖志』
清・鄧琳	『虞鄉志略』
清・黃文暘等	『曲海總目提要』
清・鄧鍾玉	『金華県志』
清・季念詒	『江陰縣志』
民國・楊復	『杭州府志』
民國・國立中央圖書館	『明人傳記資料索引』

二、現代書籍

中国民間文芸出版社『中国民間故事類型索引』1986

中国民間文芸出版社『山海經外編』1987

- 中国民間文芸出版社『浙江省民間文学集成・紹興市故事卷』1989
 中国民間文芸出版社『浙江省民間文学集成・杭州市故事卷』1989
 中国民間文芸出版社『浙江省民間文学集成・嘉興市故事卷』1991
 魯迅『中国小説史略』人民文学出版社 1982
 魯迅『中国小説史略』（中島長文訳注）東洋文庫 平凡社 1997
 戴不凡『小説見聞録』浙江人民出版社 1980
 胡士瑩『話本小説概論』中華書局 1980
 孫楷第『中国通俗小説書目』作家出版社 1957
 鄭振鐸『西諦書話』生活・読書・新知三聯書店 1983
 大塚秀高『増補中国通俗小説書目』汲古書店 1987
 小川陽一『三言二拍本事論考集成』新典社刊行 1981
 陳平原『晚清与晚明：歴史伝承与文化創新』湖北教育出版社 2002
 郭孟良『晚明商業出版』中国書籍出版社 2011
 李忠明『17世紀中国通俗小説編年史』第四章「1631～1640年」安徽大学出版社 p100

三、論文類

- 劉勇強「西湖小説：城市個性和小説場景」『文学遺産』2001(5)
 孫旭『西湖小説研究』南京師範大学文学院博士論文 2001
 張慧禾「古代杭州小説」浙江大学博士論文 2007
 鈴木陽一「白話小説はどのように解説されねばならないか—小説研究におけるパラダイムの転換を踏まえて」『中国通俗文芸への視座』1998
 鈴木陽一「『西湖二集』の「語り」について」日本中国学会全国大会 1998
 陳皆平「『西湖二集』与『牡丹亭』」『浙江大学学报』1993,7(1). pp.117-122
 阿英「『西湖二集』所反映的明代社会」『小説雜談』上海良友圖書印刷公司 1936
 陳大康「湯顯祖、虞淳熙序『西湖一集』考」、『華東師範大学学报』1989. pp.94-95
 陳国軍「西湖二集作者周清原考」『中国文学研究』1996

- 楊玉峰『『西湖二集』作者周清原辨誤』香港龍門書店 1969. p65
- 小川陽一「西湖二集と善書」『東方宗教』1978 (51), pp.16-34,
- 小川陽一「日用類書による明清小説の研究」博士論文 1993
- 鈴木陽一「岐路に立つ小説研究」『中国古典小説研究動態』第二号
- 鈴木陽一『小説における引用(intertextuality)—『西湖二集』に引用された小説と戯曲について』『人文研究』(135), pp.23-56, 1999
- 中里見敬「話本小説における物語行為」『文化』56(1/2), pp.146-127, 1992
- 鈴木陽一「小説研究の方法をもとめて—中里見論文を評す」『中国古典小説研究動態』1993(6), pp.14-17
- 中里見敬「中国語テキストにおけるディスクール／イストワール」『山形大学紀要 (人文科学)』1994,13(1). pp.233-249
- 武頭漳・于良騷『『西湖二集』簡論』『玉溪師專學報』1988(5). pp.65-68
- 吳礼權『『西湖二集』: 一部很值得研究的小説』『明清小説研究』1991. pp.116-127
- 鄭平昆『『西湖二集』金龙四大王事考』『明清小説研究』1988. p168
- 鄭平昆『『西湖二集』酒店王公事考』『明清小説研究』1988. p158
- 鄭平昆『『西湖二集』李蕃事考』『明清小説研究』1988. p128
- 鄭平昆『『西湖二集』王可久冤獄事考』『明清小説研究』1988. pp.83-84
- 鄭平昆『『西湖二集』来源考小补』『明清小説研究』1989. pp.78-85
- 鄭平昆『『西湖二集』史寺丞本事考』『文献』1990. pp.277-279
- 孫旭「西湖小説与話本小説的文人化」『明清小説研究』2003(2). pp.19-28
- 徐偉萍「論『西湖二集』的文人化特徵」『延安大學學報』2004,26(4). pp.82-85
- 石静『『西湖二集』芸術手法的文人化』『現代語文』2010(4). pp.41-43
- 王言鋒「晚明危機与白話短篇小説批判意識的增強」『南昌大學學報』2005,36(3). pp.98-102
- 陳国軍『『西湖二集』叙事品格的生成』『武警學院學報』2006,22(2). pp.79-82
- 程若且・関洪流「略論『西湖二集』与『型世言』中的明代歷史人物」『湖州師範學院學報』2006,28(3). pp.10-14
- 錢海英「淺論『西湖二集』中的女性形象」『今日科苑』2007(16). p231

- 吳艷峰「『西湖二集』の民俗色彩」『管理科学文摘』2008(1). pp.153-154
- 陳美林「擬話本『西湖二集』浅探」『江海学刊』1998(6). p167
- 張淑芬「周清原『西湖二集』研究」台湾東海大学修士論文 1994
- 邱苇氏・胡海義「明末清初西湖小説与西湖詩詞」『貴州文史叢刊』2006
- 鄭振鐸「明清二代的平話集」『西諦書話』生活・読書・新知三聯書店 1983.
pp192-193
- 伊藤清司「日本と中国の水界女房譚」昔話—研究と資料—21号『日中昔話
の比較』p8
- 蘇興「所謂『西湖一集』的問題」『明清小説研究』1990. pp.233-237
- 周楞伽『西湖二集』后記 人民文学出版社 1989
- 代智敏「選本『西湖拾遺』与原作比較研究」『船山学刊』2008(4). pp.103-106

四、『西湖二集』

- 明・崇禎間序刊本 内閣文庫（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）
国立政治大学古典小説研究中心、明清善本小説叢刊所収（1985年、天一出版社）
- 古本小説集成所収（1990年、上海古籍出版社、古本小説集成編輯委員會編）
『西湖文芸叢書』本（1981年、浙江人民出版社）
- 周楞伽編.中国小説史料叢書.人民文学出版社, 1989

附録

西湖二集 卷十七 四

才其鄧愈湯和傅友德等一時雲龍風虎之臣鷹揚
 熊貔之將都是上天星宿一羣天神下降所以旗開
 得勝馬到成功攻城畧地如風捲殘雲輔佐我
 洪武爺這位聖人不數年間成就了大明一統之
 業雖然如此識異人于西湖雲起之時免聖主
 于鄱陽砲碎之日運籌帷幄之中決勝千里之外元
 朝失之而亡天下我明得之而大一統看將起來
 畢竟還要讓他一着先手西湖一集中占慶雲劉誠
 意佐命大槩已曾說過如今這一回補前說未盡之
 事從來道爲國求賢又道是進賢受上賞大臣第一

図1. 明崇禎間序刊本（日本内閣文庫所蔵）卷十七
 「劉伯温薦賢平浙中」の写真

注釈

- ¹ 1958年古典文学出版社、1980年上海古籍出版社重印本がある。
² 1985年浙江古典出版社。ただし、節本。
³ 張慧禾「古代杭州小説」『浙江大学博士論文』2007
⁴ 『『西湖二集』所反映的明代社会』『小説雑談』上海良友図書印刷公司 1936
⁵ 魯迅『中国小説史略』（中島長文訳注）東洋文庫 平凡社 1997
⁶ 湖海士の序では以下のように述べている。

予西湖を攬勝し而して周子と交を得たり。其人曠世の逸才にして、胸に慷慨を懐き、朗朗として百間屋の如し。抵掌に至り而して古今を談ずる也、波濤洶湧して、雷震霆発し、大いに項羽の章邯を破るに似、又曹植之談ずるが如し。而して我則自ら邯鄲生たるを愧じる也。快き矣乎！余何の幸にして此を得んか？咄咄清原、西湖の秀氣、將に公に於いて盡きんとす。乃ち余に謂いて曰く：“予貧しくして客を供する能わず、客至れば柱を斫り薦を剝るを免れざるを恐れる。是を用いるに影を寒廬に匿し、敢えて長者と交遊せず。敗壁頽垣、星月穿漏し、雪霰紛飛して、幾案為に濕す。蓋し原憲之桑樞、範丹之塵釜、交集一身に於けるも、予亦之に甘んぜん；而して最も甘んぜざる所の者は、則ち司命の我を厄すること甚だしきに過ぎ、而して狐鼠の我を侮ること無端なり。予是に蒼天を望み以て興嘆す。龍泉を撫し、而して狂叫する者也。”

（中略）

時を逾え而して『西湖説』を以て見示し、予其序を読み之を悲しむ。士才を懐くも不遇にして、蹭蹬厄窮す。而して優伶と為るを願うに至り、琵琶を手にし以て世に於いて知を求む、且つは生生世世一目不識丁之人となるを願うは、真に人をして慷慨悲歌せしめ、泣數下に行かしむる也。

- ⁷ 「看官、你道杭州人不拘賢人君子、販夫小人、牧童豎子、沒一個不稱贊那吳越王、凡有稀奇古怪之事、都說道、當先吳越王怎麼樣、可見這位英雄豪傑非同小可。」
⁸ 鈴木陽一「小説における「読み」と「語り」」1997に言及した。
⁹ 『宣和遺事』元集宋・佚名

【大觀二年】徽宗隔夜夢吳越錢主、以手挽徽宗御衣云：“我好來朝你

家，便留住我；終須還我山河社稷，待教第三子來。”顯仁皇后亦夢金甲神人，自稱錢武肅王。及寤，而生皇子。蓋徽宗第九子也。其始生之時，宮中紅光滿室。宣和二年，封為康王。后即位于南京，為高宗。建都于杭州，即符錢王還我山河之夢。錢武肅王即錢鏐，享年八十一歲，高宗亦壽八十一，豈偶然哉？

- ¹⁰「還有一件好笑的事，那寶石山腳邊石塊之上，鑿有斗大的痕跡，說是吳越王卯子痕跡，道當日吳越王未遇之時，販鹽為生，挑了鹽擔，行走此山，忽然大雨地滑，跌了一交，石頭之上，印了兩個卯痕。後來杭州作耍之人，故意鑿成斗大，天雨之後，水積其中，又捉弄那鄉下的愚民道：“這卯池中水將來洗目，其目一年不昏。”鄉下愚民聽信其說，時將這卯水洗目。杭州人之好作耍如此，你道不是一件極好笑的事麼！」
- ¹¹「(前略)初投詩於吳越王曰：“貴逼身來不自由，龍驤鳳翥勢難收；滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州。萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞；他年名上凌煙閣，豈羨當時萬戶侯。”王語之曰：“詩則美矣，若能改作四十州，當得相見。”師喟然曰：“州不可添，詩亦不可改。孤雲野鶴，何天之不可飛耶？”遂杖錫去之。」
- ¹²「禪月，貫休嘗以詩投之，曰：“貴極身來不自由，幾年勤苦踏山丘。滿堂花醉三千客，一劍光寒十四州。萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞。他年名上凌煙閣，豈羨當時萬戶侯”鏐愛其詩，遣客吏諭之曰：“教和尚改十四為四十州，方與見。”休性褊介，謂吏曰：“州亦難添，詩亦不改，然聞雲孤鶴，何天而不可飛耶”遂飄然入蜀，以詩投孟知祥。有“一瓶一鉢垂垂老，萬水千山得得來”之句。知祥厚遇之。鏐後果為安重誨奏削王爵，以太師致仕，重誨死，明宗乃復鏐舊爵位。」
- ¹³「禪月貫休嘗以詩投之，有“滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州”之句，鏐愛其詩，遣客吏諭之曰：教和尚改十四為四十。方與見。休性區介，謂吏曰：“州亦難添，詩亦不改。然聞雲野鶴，何天而不飛耶？”遂飄然入蜀，鏐後果為安重誨奏削王爵，以太師致仕。重誨死，明宗乃復鏐爵位，夫武肅之逾越，固莫逃乎二書所論。」
- ¹⁴「僧貫休，婺州蘭溪人。錢鏐自稱吳越國王，休以詩投獻，內有“滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州”之句。鏐諭改為四十州，乃可相見，曰：“州亦難添，詩亦難改，聞雲孤鶴，何天而不可飛？”遂去而入蜀。」

- ¹⁵ 「貫休者，以詩謁錢武肅王雲：“貴逼身來不自由，幾年辛苦踏山丘。滿堂花醉三千客，一劍霜寒十四州。萊子衣裳宮錦窄，謝公篇詠綺霞羞。他年名上凌雲閣，豈羨當時萬戶侯？”王愛其詩，遣客謂曰：“教和尚改十四州為四十州，方與相見。”休曰：“州亦難添，詩亦難改，閒雲孤鶴，何天不可飛耶？”飄然入蜀。」
- ¹⁶ 「屯難之世，君子遭遇不幸往往有之。唐進士章魯封與羅隱齊名，皆浙中人，頻舉不第，聲采甚著。錢尚父土豪崛起，號錢塘八都，洎破董昌，奄有杭越。於是章、羅二士羅其籠罩。然其出於草萊，未諳事體，重縣宰而輕郎官，嘗曰：“某人非才，只可作郎官，不堪作縣令。”即可知也。以章魯封為表奏孔目官，章拒而見答。差羅隱宰錢塘，皆畏死稟命也。章、羅以之為恥，錢公用之為榮。玉石俱焚，籲，可惜也！」